

2001.05

わたしの「歌」日記 栗木京子



「二階に積んである短歌の本、今月中にかならず引き取りにきてね」

春弥生のうららかな朝、実家の母から非情な電話が掛かってきた。わが家に収納しきれなくなった歌集や歌書を少しずつ実家に運び込み、嫌がる母を説き伏せて置かせてもらっていた。だが、わが慈母もついに堪忍袋の緒が切れたらしい。無理もない。書籍のみならず、使わなくなったエレクションや貰い物の

そういう人にとって、歌集や歌書は厄介なお荷物以外の何物でもないのである。それは確かにそうだろう。置きっぱなしでほとんど開いてみることもない本なら捨てたも同然、と解釈されても弁解の余地はない。

思えばこの書物たちは、三年前の春にもつらい流浪の日々を体験したのであった。当時わが家では親戚の経営するアパートの一室を書庫替わりに借りていた。住居用に貸すには狭すぎる部屋が一つだけあり、頼み込んで格安の家賃で使わせてもらっていたのだ。しかし建物の老朽化がすすんで全面改築することになり、立退きを迫られてしまった。そうなるとうも難民状態である。自宅に引き取って手厚く保護したいのはやまやまなのだが、マンション住まいで収納スペースが全くない。ベランダに小さなキャビネットを据えてそこに多少の本を蔵しているのだが、それも限界がある。困り果てて結局そのときは実家の二階に緊急避難したわけなのだが、このたびはまたも出ていかねばならぬめぐり合わせとなった。「女三界に家無し」と言うが、歌集の運命はもつと苛酷である。

母から電話があった数日後、私は組み立て式スチール製本棚と青いビニールシートを車に積んで実家を訪ねた。手には軍手、目にサングラス、口にはマスクのいでたちである。こうなったら致し方ない。二階から本は撤去しましょう。けれどもこの家の他に持ってゆく場所がない。ならば、と窮余の策として「軒先」に目を付けたのであった。門から庭

食器、季節ごとの洋服や靴までどんどん預けていったので、二階の六畳間はもう足の踏み場もない状態なのである。

「洋服やバッグは預かってあげる。でも本だけは何とかしてね。重くて埃っぽくて、見るだけで具合が悪くなりそう」

電話口から情け容赦のない言葉が追い討ちをかけてくる。母はあまり読書が好きではない。しかも短歌に何の興味も持っていない。

へと通じる東側の通路に通常より深く軒を張り出した部分がある。そこにスチール製本棚を置き、本を並べたのちにビニールシートで覆って雨風を防ごう、という計画である。放浪の旅人が一夜民家の軒下で雨露をしのぐ。発想は哀れそこから生まれている。

「美観が……」近所の手前が……と難色を示す母を拝み倒し、何とか軒下への大移動を終えることができた。

こんなことまでするならいっそ処分してしまえば……と幾度となく考えた。だが、長年苦楽をともにした本の数々にはひとかたならぬ愛着がある。それに妙なジンクスがあつて、手放した途端にその本が必要になって慌てることがたびたびあつたのだ。

シートを掛けられ紐でぐるぐる巻きにされた本棚はさながら廢墟である。書物の魂は、きつと憤り、嘆き悲しんでいるだろう。今夜の夢に青いシートのお化けが出てきそう、ひそかに怯えている私なのである。

書物にも翼あるなら崑崙まで飛びたから
むよ うらら春の日

(くりききょうこ「塔」選者)

このコーナーは番組進行役の梅内美華子さんと栗木京子さんが月交替で執筆します